

遺留品、鑑定で日本兵と判断

旧日本兵の遺骨収集事業を巡っては、シベリア抑留者の遺骨を取り違えた可能性が高いとのDNA型鑑定結果が出るなど問題も指摘されている。

これに対し、岩瀬宣輝さんは「疑念を持たれるのは非常に残念。インドネシアでは明確に日本兵だ」という確証を得て帰還させている」としている。

太平洋戦史館が参加する同国での遺骨収集では遺骨と共に見つかる遺留品によって日本兵と判断するほか、法医学者による鑑定も行われる。鑑定後に現地で火葬を行う。

厚生労働省の有識者会議で、現地で火葬せずに遺骨を持ち帰る案が出ていることについても「死者儀礼を欠くようなやり方は問題がある。そのような議論に時間を費やすより、残された兵隊を早く帰還させることに全力を挙げるべきではないか」と疑問を呈する。

岩瀬さんは「歯ぎしりをしながら待ち続けていた。 unnecessary中断をさせたことをまずは現地で兵隊さんに謝りたい。再開を機にこれまでに活動を活性化させたい」と語る。

西国は今年6月に遺骨収集協定を締結し、再開を決定。スピオリ市からの遺骨帰還が実現すれば戦後初といい、これを皮切りに、調査も含めて年6回程度の派遣を計画している。



ビアク島 本県出身者を中心に構成された歩兵222連隊（約3600人）など、陸海軍合わせて約1万1千人が展開し、95%が亡くなったとされる南太平洋の激戦地。厚生労働省によると、同島を含むパプア州と西パプア州の戦没者は約5万3千人で、現在も約2万柱の遺骨が残されている。太平洋戦史館は政府の委託事業などを通じて、1999年から1568柱の帰還を実現させている。



来年1月に第1陣

2015年から中断していたインドネシアでの政府の日本人戦没者遺骨収集事業について、来年1月にも第1陣がパプア州・スピオリ市に派遣される方向となった。戦後74年を迎える現在も多くの本県出身将兵が眠る地で、15年に遺骨を発見しながら事業の中断で帰還させることができずにいた。参加するNP（法人太平洋戦史館（奥州市衣川）の岩瀬宣輝代表理事（77）は「置き去りにしてしまった兵隊たちを一人でも多く帰還させたい」と出発を心待ちにする。

厚生労働省などによると、第1陣は1月から約2週間の日程で、スピオリ市のアイブラボンディ島とムサビ島に派遣される方向で検討が進んでいる。日本からは太平洋戦史館のメンバーが、政府委託を受ける日本戦没者遺骨収集推進協会の一員として参加。インドネシア政府関係者らと合同チームを編成し、遺骨の調査・収集を行う。

両島は、多くの本県出身者が亡くなったビアク島を中心としたビアク諸島に含まれる。同島から敗走した兵士が命を落としたとみられるほか、流れ着いた日本兵の遺骸を古井戸などに入れたという現地住民の証言もある。実際、15年10月に行った岩瀬さんから戦史館メンバーの調査で、遺骨120柱が発見されていた。

だが、日本に持ち帰ろうと準備をしていたところ、日本政府の連絡ミスなどが判明。遺骨を仮安置したまま

インドネシア戦没者遺骨収集

「帰還、一人でも多く」本県活動団体

ま帰国を余儀なくされ、その後、西国間の遺骨収集の覚書が失効したことで、事業中断が続いていた。岩瀬さんは「歯ぎしりをしながら待ち続けていた。 unnecessary中断をさせたことをまずは現地で兵隊さんに謝りたい。再開を機にこれまでに活動を活性化させたい」と語る。

西国は今年6月に遺骨収集協定を締結し、再開を決定。スピオリ市からの遺骨帰還が実現すれば戦後初といい、これを皮切りに、調査も含めて年6回程度の派遣を計画している。

戦史館はホームページを刷新し、情報を発信している。岩瀬さんは「ビアク島周辺は全国でも最も本県に関係のある土地だ。改めて遺族会を含めた地元の方々に、いまだに多くの兵士が帰れずにいる現実を理解してもらいたい。戦史館の活動にもぜひ協力してほしい」と期待する。

「もう二度と…」だから残す

インドネシア

島に眠る激戦の遺物 作家ら写真集に

銃弾や短剣、水筒、硬貨……。トタン屋根の小屋に数千の古びた品々が並ぶ。旧日本兵らが、太平洋戦争の激戦地となったインドネシア東部のビアク島に残したものだ。

島に住むフィラウン・コイブルさん(37)が2年前から、白骨があちこちで見つかる洞窟や林で集めてきた。当初は、鉄を売って生活費の足しにした。だが1年前にやめて、最近、見学者用の芳名帳を用意した。

「大勢の犠牲者を出した戦争を二度と起こしてはいけないと感じる。多くの人に見てもらいたい」

厚生労働省によると、ビアク島やニューギニア島のあるパプア州と西パプア州では、推定約5万3千人の旧日本兵が戦死した。1956年から計25回の遺骨収集をしたが、推定1万9570柱が今も置き去りのままだ。

収集事業は2015年に中断したが、来年に再開する。まずは、ビアク島の隣のスピ

オリ島に近い小島ムサキなどが対象。記者が3日にムサキを訪ねると、100以上の骨が小屋に保管されていた。ただ、はるかに多くの数が地震による津波で海に流されたという。

出征した父をパプア州のあるニューギニア島で亡くし、インドネシアでの遺骨収集に長くかかわってきた岩手県奥州市の岩淵宣輝さん(77)は、焦りを隠さない。「国が始めた戦争の後始末を、なぜ今も終えられていないのか」。戦争の歴史の風化への懸念も深い。だが「想定外の喜び」と話す動きが最近あった。

ジャカルタに住む作家で民族誌研究者のエビ・アルバイさん(40)が昨年、全国紙の記者や写真家ら同世代の計9人でチームを組んで、ビアク島で戦争に関する取材を始めたのだ。

エビさんは、パプア州の観光イベントに携わった後に、魅力を再発見しようと島を歩くなかで、島で起きた戦闘を

初めて知った。44年、旧日本軍と連合国軍の間で約3カ月間続いた「ビアク島の戦い」だ。

「インドネシア人にとって、戦争といえば(オランダからの)独立戦争。太平洋戦争には真剣に目を向けてこなかった」

岩淵さんの自宅や東京・千鳥ヶ淵の戦没者墓苑も訪問。ビアク島の戦いが現代につながっていると感じ、戦争の遺物に焦点を当てることにした。若い世代に興味を持ってもらうため、232頁のカラー写真集に仕立て、「ビアク戦争の残骸」とのタイトルで近く出版する計画だ。

すでに反響があった。ビアクの観光学校で講師を務めるムルスダリア・タナルティさん(28)は、砂浜で拾った銃弾を調べるなかで写真集の告知を見つけ、エビさんに連絡した。「写真集は次世代に伝えるためにとても大事だ。戦史を学ぶコミュニケーションをつくりたい」(ビアク島 野上英文)

南方からの声

語り継ぐ戦争 下

戦争当時の銃弾などの遺物を集めているフィラウン・コイブルさん
 下 「第2次世界大戦慰霊碑」で取材するエビ・アルバイさん(いずれも4日、ビアク島)

